

霞

—2018年度冬季展示室だより—

土浦市立博物館

平成31年1月5日発行(通巻第45号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(45)

古写真「土浦商工会主催の広告祭」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(45)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び展覧会と催し物等】
- めでたい文字(古代)・・・2
- 慕われた戦国武将(中世)・・・3
- 藩主祖母の長寿を祝う(近世)・・・4
- 刀を贈る年始の儀礼(近世)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「聴きたいこと、話したいこと」・・・8
- コラム(45)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

昭和7(1932)年12月に土浦商工会が主催した広告祭のようすです。各商店街による仮装行列が行われ、土浦城跡前から出発しました。飛行機の大型模型や水兵服・飛行服姿があるのは、大正11(1922)年に阿見におかれた霞ヶ浦海軍航空隊の影響でしょう。サンタクロースもいます。

【情報ライブラリー検索キーワード「まつり」「行事」】

博物館からのお知らせ

★★茂木雅博の館長講座★★

1月20日(日)、2月17日(日) 各日とも午後2時~(1時間30分程度)

テーマ:「館長が語る発掘物語」 会場:博物館視聴覚ホール

「日本の前期古墳の調査」(1/20)・「大和の古墳の調査」(2/17)

★★参考展示「昔のくらしの道具」★★

1月5日(土)~2月24日(日)

小学3年生の校外学習に合わせ、昔の人が使ったくらしの道具を紹介します。

★★博物館のひな人形★★ 1月5日(土)~3月3日(日)

博物館所蔵の江戸時代後期から明治時代のひな人形を飾ります。

★★はたおり作品展★★ 3月2日(土)~4月7日(日)

はたごしらえ講座受講生とはたおり伝承グループ「綿の実」による作品展です。綿の種とり体験やはたおり体験もできます。

★★第40回特別展「町の記憶—空都土浦とその時代—」★★

3月16日(土)~5月6日(月)

ふたつの航空隊の影響をうけて変容した町と人々が戦争という現実に向き合った様相を、人々の記憶と残された資料でたどります。

○記念講演会「ふたつの航空隊と空都土浦」3月24日(日)午後1時半~3時

講師:伊藤純郎さん(筑波大学教授) 会場:視聴覚ホール 定員70名 *2月26日(火)~電話又は当館にて事前申込受付。

※そのほか展示解説会や史跡めぐりなどを予定しています。関連イベントの詳細はお問い合わせください。

★休館のお知らせ★

- ・毎週月曜日
- (但し1月14日、2月11日を除く)
- ・1月15日(火)
- ・2月12日(火)
- ・3月22日(金)

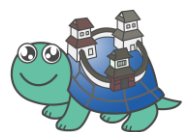
★祝日開館します★

- ・1月14日(月)成人の日
- ・2月11日(月)建国記念の日
- ・3月21日(木)春分の日

★特別展準備のため無料開館します★

- ・3月9日(土)、10日(日)
- 展示室1・2、東櫓
- ・3月12日(火)~15日(金)東櫓のみ

博物館マスコット
亀城かめくん



※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

めでたい文字

ながみね ぼくしよどき —長峯遺跡の墨書土器—

現在も行われる新年の習俗のひとつに書初めがあります。冬休みの宿題として、墨と筆で書く文字に思いを込めた方も多いことでしょう。もともと書初めは吉書とも呼ばれ、正月2日にめでたい文字を書く宮中の行事が発祥といわれ、古くから文字を書く儀礼が行われていたことを示します。

古代の遺跡でも、文字を書く儀礼を想定させる出土品が見つっています。墨書土器と呼ばれるもので、器の表面に墨で漢字が1、2文字書かれています。都である平城京や平安京、地方の国や郡の役所跡はもちろんのこと、末端に位置する集落跡でも出土しています。とりわけ奈良時代から平安時代（8～10世紀）の東国の集落跡で多く見つかり、古代の地域社会に残された数少ない文字資料として貴重な出土品といえます。集落跡で出土する墨書土器の文字には、地名や人名なども見られますが、吉祥句と呼ばれるめでたい文字が多く含まれています。このような墨書土器の傾向は集落跡の特徴といわれます。社会の末端に暮らす人々は、日常的に使用する食器にめでたい文字を書くことで、神仏に自らの期待や願望を祈ったのかもしれませんが。

下の写真は、土浦市東部にある田村・沖宿遺跡群の長峯遺跡から出土した墨書土器で、竪穴住居跡から見つかりました。遺跡は竪穴住居跡が16軒と掘立柱建物跡が5棟などからなる集落跡で、平安時代（9世紀代）に営まれました。合計23点の墨書土器が出土し、多くは土師器杯と呼ばれる日常の食器で、その側面や底面に墨書がされていました。めでたい文字には「万福」「福得」「福福」があります。「万福」と書かれた土器には墨を磨る硯として利用されたものもあり、集落に暮らす人々が文字を書いていたことは明らかです。「万福」や「長谷寺」と書かれた墨書土器がひとつの竪穴住居跡から出土し、仏堂跡が想定される建物からも「福得」と書かれた墨書土器が出土しました。これらには、集落の人々が仏教の信仰ともかわりを持って、現世利己的な発想でめでたい文字を土器に書き、そうありたいと願った様子を想像することができます。

長峯遺跡で出土しためでたい文字の墨書土器は東国の集落跡の特色を良く示すものといえます。文字を土器に書く儀礼をとおして、集落の中にも文字が浸透していったのかもしれませんが。（関口満）



墨書土器「万福」



墨書土器「万福」が出土した竪穴住居跡

1/19（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも古代コーナーに展示）

- 墨書土器「長谷寺」（当館所蔵）
- 墨書土器「國厨」（当館所蔵）



慕われた戦国武将

—小田氏治の百五十回忌—

小田氏は、鎌倉時代に常陸国守護を務めた初代の八田知家^{はつたともいえ}以来、400年もの長きにわたり常陸南部の地を治めた名門です。戦国時代、天文17（1548）年に父小田政治の死去に伴い家督^{かどく}を継いだのが、小田氏治（1531～1601）です。北からは越後の上杉氏、南からは後北条氏が進出するなか、常陸南部は激しい戦乱の舞台となり、氏治も生涯を通じて戦いの日々を送ることになります。本拠である小田城を奪われながら幾度も取り戻す姿から、最近では「常陸の不死鳥」とも呼ばれるようになりました。昨年6月には、NHK総合テレビ「歴史秘話ヒストリア」で特集されたことも、記憶に新しいところです。

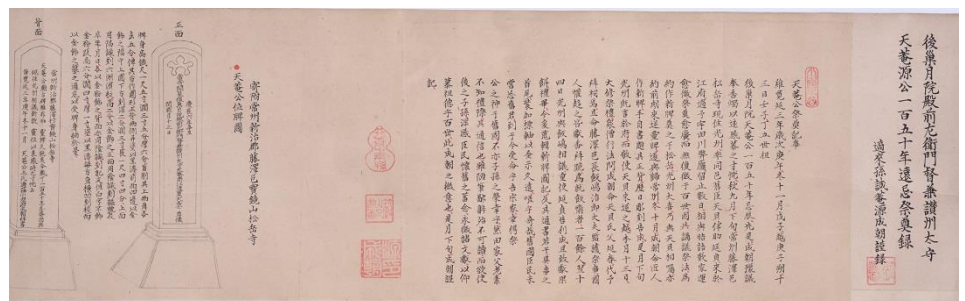
氏治は、小田城落城後も、土浦城^{きだまりじょう}や木田余城^{きだまりじょう}を拠点に戦いを続けますが、次第に劣勢に立たされ、やがて領主としての地位も失うことになりました。最後は結城氏の客分となり、慶長6（1601）年に越前で亡くなります。波乱に満ちた71年の生涯でした。

戦国の世が終わり、江戸時代になると、それまで各地を治めていた領主層は藩主などになり、多くは中世以来の土地を離れることになります。土浦も松平、西尾、朽木と藩主が目まぐるしく変わり、やがて土屋家が長く治めることになります。しかし、400年もの長きにわたって常陸南部を治めてきた小田氏が忘れられることはありませんでした。

小田氏治が没してから実に150年程経った寛延3（1750）年、氏治の百五十回忌が藤沢村（土浦市藤沢）の松岳寺^{がくじ}で執り行われました。その内容は、「天庵公一百五十年忌祭録」という題をもつ巻物にまとめられています。冒頭には、小田成朝という人物がこの百五十回忌を行う経緯などを漢文で記しています。小田氏治には友治と守治という二人の男子がいましたが、成朝は友治の子孫にあたり、この当時江戸の芝にいたようです。巻物には百五十回忌の準備にあたって交わされた書状も収められていますが、それによれば藤沢村の天貝久左衛門と松岳寺の僧が中心になって企画されたことがうかがえます。百五十回忌はこの年の11月13日に、100人以上の人が参加して行われたと書かれています。

香典を出した人の名も列記されていますが、多くは藤沢村の人々です。中心となった天貝久左衛門も藤沢の人で、「旧臣方」と添え書きされています。「旧臣」すなわち小田氏の旧家臣の中には農民として土着した者も多かったようで、そうした人々によって回忌供養が催されました。小田氏治がいかに慕われ、語り継がれてきたかがうかがえます。それと同時に、それぞれの家にとって小田氏との関係性を確認する場としてもこの百五十回忌が機能したことも見逃せません。

（堀部猛）



天庵公一百五十年忌祭録（法雲寺所蔵）

2/9（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも中世コーナーに展示）

- 小田天庵供養塔（法雲寺所蔵、写真パネル）
- 埋蔵銭（当館所蔵）



はんしゅ そ ぼ ちょうじゅ
藩主祖母の長寿を祝う

しょうゆう が えい
— 松友雅詠 —

古稀70歳を迎えた女性のお祝いです。どんな言葉を贈りましょうか？

「長寿は天がなかなか与えないものです」「飲食も衰えず、歩くのもしっかりなさっていらっしやいます」「銘酒とおいしい料理、よい品物がたくさん並びました」などと祝賀の辞を受けたのは、3代藩主土屋陳直の夫人栄寿院（1713～97）で、天明2（1782）年5月のことでした。

このときの藩主泰直や親戚、家臣らが慶祝をこめて漢詩や和歌、俳句を詠みました。その数は漢詩9首、和歌200首、俳句84句に上ります。これらを収録して「松友雅詠」という書物が刊行されました。序文は林家塾頭関修齡が作文し、土浦藩の儒者関其寧が筆をとり、跋文は同じく土浦藩の上原毅が執筆して、格調高くまとめました。菊の模様と寿の文字を透かした用紙の、凝った一冊です。

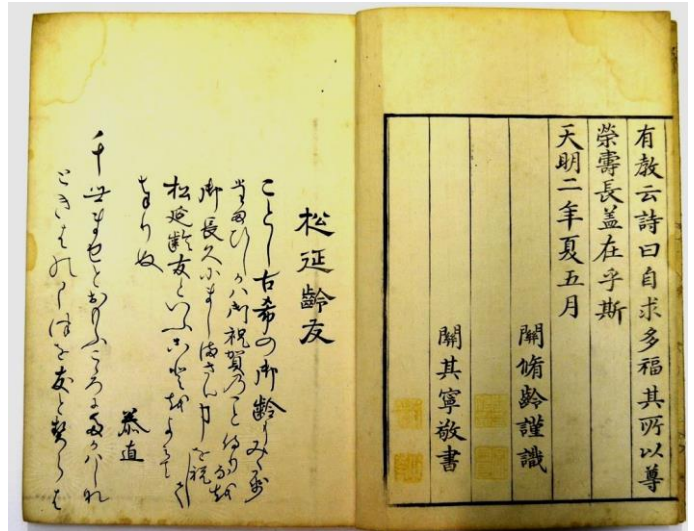
人生50年と言われた時代に70歳を迎えられたのは稀なことでしたが、大がかりに祝賀が行われた理由は長寿だけではありません。

栄寿院は土屋家の家臣佐藤氏の女です。陳直は正室として、大名水野忠周の女類子、類子没後はその妹近子を迎えていました。栄寿院は正室ではありませんが、篤直を産んで藩主の生母となりました。篤直の3人の男子寿直、泰直、英直が次々に藩主になりました。

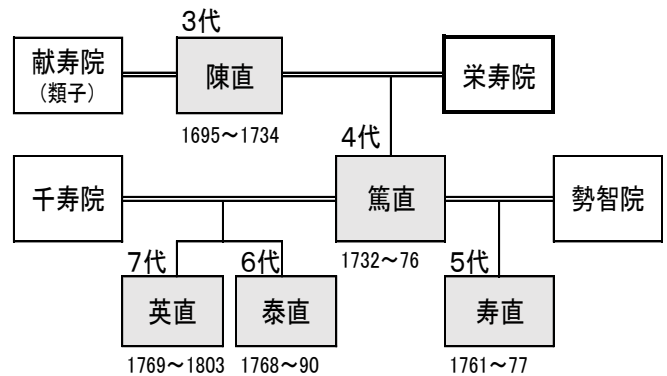
栄寿院が古稀を迎えた時、3代藩主陳直も4代篤直も没しており、篤直の長男で5代藩主の寿直も亡くなっていました（安永6〈1777〉年・享年17歳）。寿直の弟泰直が6代藩主に就いていましたが15歳になったばかり、弟英直は14歳でした。孫にあたる篤直の3児を見守り、祖父や父の姿や教えを伝えたのが栄寿院だったのです。

栄寿院は、寛政2（1790）年、泰直が23歳で没し、英直が藩主を継いだのを見届けて、寛政9（1797）年、85歳で亡くなりました。「松友雅詠」は3代藩主夫人であり、4代藩主の生母、5代・6代・7代藩主の祖母として、土屋家を支えた栄寿院への尊崇を示す貴重な文献です。

（木塚久仁子）



「松友雅詠」（序文・泰直の和歌の部分）当館所蔵



2/2（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近世コーナーに展示）

- 「垂松亭八景詩巻」（当館所蔵）
- 「土浦道中絵図（複製）」（当館所蔵）



刀を贈る年始の儀礼

—藩主使用の公用記録—

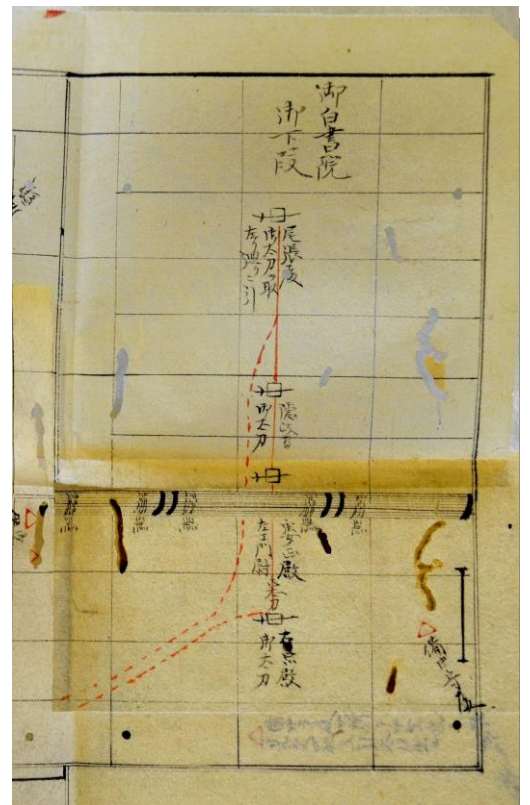
これまでの「霞」では、41・42号で安藤家文書の公用記録を取り上げました。今回は、そこに記された刀剣の献上儀礼に注目してみます。取り上げる史料は、寛政9（1797）年正月朔日（1日）の記録です。本来は、幕府の儀礼などを掌る奏者番を務めた諏訪因幡守（忠誠）が所持していた記録ですが、それを土屋采女「正」（寅直）が写したものです。寅直は、土浦藩土屋家10代当主で、天保14（1843）年11月から奏者番を務めました。

江戸時代は現在とは異なり、身分が社会の秩序を支えていました。そのため、特に武家では身分と格式を重んじる儀礼が数多く執り行われていました。そのうちの 하나가、年始登城です。徳川家の親族である御三家や国持ちの大名をはじめとする武家は、年始に江戸城へ登城し、将軍とその後継者に挨拶をします。その場所では献上品が欠かせませんでした。

では、どのような品が献上されたのでしょうか。それが、今回のタイトルにもある刀、そして馬です。とはいえ、実際には馬一頭に相当する金子を渡すことで代用し、刀も木製の「飾り太刀」を用いていました。そして、これらを書き上げた目録とともに、将軍へ献上しました。

実際の儀礼を少し見てみましょう。年始挨拶と太刀・馬の献上は、江戸城の白書院と呼ばれる間で、尾張徳川家、加賀藩前田（松平）家、福井藩松平家、水戸徳川家からはじまり、大廊下や溜りの間に詰める徳川一門や譜代大名が続きます。このうち、尾張徳川家（徳川宗睦）の事例を見てみましょう。まず奏者番が「尾張大納言殿」と小声で話しかけ、太刀目録を渡します。宗睦が太刀と目録を将軍へ披露し着座したとき、奏者番は同人の正面で礼をし、左側へ回ります。そこから宗睦の前に出て献上された太刀を引き取ります。このような礼を行う場所については、大名の家格に応じて厳密に取り決められ、奏者番は儀礼を補佐する役割を担っていました。一つ一つの動作や格式に応じた礼を学ぶため、過去の記録を写し取っていたと考えられます。

ちなみに、年始の太刀献上が「作り太刀」に置き換えられたのは、享保7（1722）年7月のことで、献上品の残りや払い下げ品を扱った「献残屋」から買い取ったものを利用していました。また、献上儀礼の際には刀剣の鑑定を行う本阿弥家や、蒔絵師の幸阿弥家ら、将軍家お抱えの職人が立会っていたことも記されています。



（西口正隆）

動作を記した図

（「正月朔日当番相勤候留」より）当館所蔵

2/16（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも展示室1に展示）

- 鐔「福祿寿図」（当館所蔵）
- 雛人形（当館所蔵）



市史編さんだより

中世史料調査での思い出話（その2）

前回は『土浦市史』編さんの時でしたが、今回は『阿見町史』編さんの時の私の「勇み足」の話です。

土浦は信太庄の東北端で、信太庄は戦国期の永正(1504~21)頃には山内上杉領で、上杉氏の被官数人が代官として分割支配していました。「臼田文書」土岐原源次郎宛の「上杉顕定感状」（永正7年以前）を見ると、代官達が上杉派・小田派に分かれて争っています。

上杉派の中心は江戸崎（稲敷市）の土岐原氏ですが、系図は、明応6(1497)年景成没後に男子がなく、美濃の土岐治頼が跡を継ぐ、とあります。『稲敷郡郷土史』龍ヶ崎の項、師岡氏由緒書に「濃州土岐殿御子息の御三男武者修行被成候とて関東江御下り被成候、(中略)駿河国迄御下り五三年も御座候て、従夫常陸国江戸崎と申所へ御下り、江戸崎に二三年御座候由申伝候」とあり、三男が治頼で、土岐原家に入贅したとあります。一方「安得虎子」の「土岐古状之写」には、永正9年小笠原隆氏が土岐源二郎に与えた兵法の免許状に「分国乱に逢ふにつき不慮の外に落人となり、関東流露の時節」とあります。これを治頼とすると当時の美濃の状況とは思えず、土岐氏の系図でも二郎は頼芸で三男は三郎(治頼)です。また源次郎は土岐原代々の名で、贅になる前では合わないことから、源次郎・源二郎は景成の子で、江戸崎占領後追放されたと見ました。

小田政治は父成治同様公方高基方で、上杉氏とは対立関係にありましたから、信太庄進出を図り、代官の一部を取り込んだと思われる。土浦城攻略もそうした動きの中での事件でした。

冒頭の「上杉顕定感状」の所で代官達の争いに触れましたが、その後「真壁文書」に大永3(1523)年土岐原治頼が屋代城(八代城、龍ヶ崎市)攻略の帰路、小田政治の軍と遭遇して破った、とあるまでの間の土岐原氏の動向が分かりません。そこで『阿見町史』に、この間の出来事を二つ、推測で書きました。

一つは、「永正7年から9年ごろに、小田氏は江戸崎城も攻め落とししたものと考えられる」です。実は小田政治が江戸崎を攻略したという根本史料はないのです。ただ、傍証は幾つかあります。

- ① 稲敷市福田の岡沢家に、永正14年に小田政治が岡沢氏の刀鍛冶職を安堵した判物がある。
- ② 土岐原家臣大越氏(阿見町上条)の系譜に、政明が天文年間に敵のため上総へ逃れたとある。敵は土岐治頼で、成明が小田方になったためと思われる。妻の家は美浦村舟子の小泉氏で、小泉氏も小田家臣と伝えられる。その後小田・土岐間も友好関係になり天正期孫長善の時には帰郷している。
- ③ 外にも同じ舟子の佐野氏や大谷の秦野氏などが小田の家臣だったという伝承がある。
- ④ 天文年間土岐治頼に滅ぼされた伊佐津(稲敷市)の金剛寺甲斐守は小田氏の武将とされる。
- ⑤ 『新編常陸国誌』は「事蹟雑纂」を引いて、小田氏治による江戸崎落城の伝承を伝えている。

などです。以上の事から小田氏の永正年間の信太庄攻略を示唆すると解しました。④はその後『新利根村史二』で、岡野家に伝わる永正年中小田天庵(氏治)に滅ぼされたとの別伝を知りましたが、この見方は今でも変わりません。ただ永正7年は顕定感状からの推定ですが、9年は、もし土岐原源次郎=土岐源二郎が治頼としても、小笠原氏隆の免許状の差出年が駿河時代と思われるので、治頼の江戸崎入りの前であり、9年でもよさそうと見たのです。しかし、漠然と永正年間とすべきだったかな、とは思います。

もう一つは、大永3年の土岐原治頼の八代城攻略に続けて、「その基地は江戸崎ではなく、龍ヶ崎とみられる」とした点です。落城後の居所の移動先は、②や④の外、牛久市久野の観音寺棟札から大永5年久野の大旦那であること、美浦村の木原城が永禄の築城であることなどから、信太庄回復が西から東へと進んだと見、龍ヶ崎をその拠点と見たのです。信太庄代官間の対立は上杉氏が頼りなかったからとすれば、土岐原家に嫡子がなかった、或いは落城で失踪した、いずれにせよ旧小田派代官等の取りなしも考えられ、小田氏にしても征服後の土岐原氏を全滅する必要はなく、土岐原家はその後江戸崎に居続けていたとも考えられ、治頼の拠点は不明のままとすべきでした。

(市史編さん係非常勤職員 雨谷昭)

地域と博物館

博物館の運営（4）～学芸員として～

行財政全般の効率化を図る動きの中で、平成 13（2001）年 4 月から奈良・京都・東京の国立博物館 3 館が「独立行政法人」となり、純然たる公立博物館ではなくなりました。情報化社会、高齢化社会など急速な社会の変化に対応するために、そして現代社会の求めに応じるためにという理由から、博物館自身はその運営を経営的な視点で見直さなければならないと言われていました。国立博物館の独立行政法人化はその先鞭をつける改革であり、主要なねらいは博物館業務の効率化と収益を効果的に活用する自律的運営の向上にあると考えられます。

このような博物館運営の見直しの中で、博物館の専門職である学芸員にも意識改革の必要性が指摘されています。これまでのように、学芸員が資料の収集保存、調査研究、展示、教育普及といった博物館法に基づく基本的業務を考えているだけでは、博物館は「社会のニーズ」や「時代の変化」に対応できないと言われていました。たとえば、社会のニーズに答えているかどうかの評価基準として博物館の入館者数を採用することによって、これまで以上に集客を重視する考え方が出てきています。そこでは、従来の学芸員は優れた調査研究成果やそれに基づく質の高い展示を標榜するだけで、集客を軽視してきたと問題視されています。

より多くの市民に博物館へ足を運んでもらうために、近年になって「ミュージアム・マネージメント」の必要性が説かれています。ミュージアム・マネージメントは、文字通り「博物館の経営」のことを意味しています。博物館の適切な管理運営を示していますが、具体的には経営の視点や集客を優先して考え、博物館事業を効率よく効果的に運営することがねらいです。これは、利用者尊重の立場に立って、来館者に楽しみと満足を与え、積極的にサービスを提供する運営手法だと言われています。

一方学芸員にとっての適切な管理運営とは、収集保存、調査研究、展示、教育普及の博物館の四つの機能が十分に発揮できるように事業が適切に行われることと考えられます。博物館利用者との関係性については、資料の保存対策、調査研究の成果、それに基づく展示・教育内容のすべてにおいて、信頼される学芸員であり博物館であることが究極の目標と言えるでしょう。ミュージアム・マネージメントが重視する来館者の楽しみや満足感は、時の流行や個々人の嗜好などに左右されやすいものでもあります。博物館活動は一過性ではなく、長期的かつ継続的な取り組みを理想としています。このような観点からすると、学芸員は利用者である市民の信頼を優先して考え、収集保存や調査研究、展示教育のより一層の充実を図るべきと思われる。

多くの市民に博物館を利用してもらうためには、博物館の広報や情報発信を充実させることが大切であり、活動内容のひとつひとつが周知されることは博物館への信頼にもつながります。また、全国各地の公立博物館で働く学芸員の実状は、事務や行政対応に追われる毎日で、質の高い調査研究や展示を標榜する余裕すらないのが現実です。博物館運営における喫緊の課題は、広報活動に専従できる人的整備と、学芸員が資料整理や調査研究に専念できる組織体制の見直しにあると考えられます。（塩谷修）



ホームページによる広報・情報発信

霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、当館の元学芸員 榎陽介さんに寄稿していただきました。

聴きたいこと、話したいこと

随分と昔のことですが、ある自治体史の民俗編のため、調査に関わったことがありました。そのとき、昔話を専門とする年長の女性調査員にお世話になりました。ゆっくりと穏やかにとても上品に話す方で、古からの民俗学者でした。その方がまだずっと若い学生の私に話してくれた内容を今でも覚えています。

「だれでもお年寄りには話したいことがある。だからじっくりとそれを聞くことが大切なんですよ」。調査というのは、どうしても聞きたいことが優先してしまうことがあります。そうではなくて、相手がいま話したいなということを受け止めることが大事なんだ、という話でした。

それからかなり後、土浦の博物館に所属していたとき、農作業で使う鍬のツル、つまり柄をつくる木工職人に話を聞きに行く機会がありました。木工の技術を応用してか、綿の種を切り落とす綿繰り機も作っているという話をききつけたためです。もう高齢の男性で、話が次々とスムーズには聞けませんでした。そうしているうちに、いつしか、自らのフィリピンでの悲惨な戦争体験の話になりました。結果的に、そのままフィリピンの話を聞いてしまいました。

本来聞きたいことは聞けませんでした、話者は話したいことを話せたようです。調査としては失敗だったかもしれませんが、ひとりの人間の歴史の一齣^{ひとこま}に触れたような気がしました。

話したいことを語る「語り」に出会うと、本筋を離れていても、なぜか引き付けられるものです。今、オーラルヒストリーの本を読んでいるところですが、森崎和江も相手の話をたいせつにしたのだと著者が記していました。たしかに、そういう話にはなぜか力があるものだと思心しました。

(榎陽介)

コラム (45) モノにやどる「価値」とは？

美術的な価値がないから、この資料はいらないだろう。そんな意見や質問を時々耳にします。そんな時、私は別の価値の話をするようにしています。今回は、その一事例を紹介します。古い刀が出てきたというご相談があり、お宅へ伺うと、桐箱に入った短刀^{かたな}がありました。たしかに、美術的にすこぶる良い品とは言い難い、水戸の刀鍛冶^{かたな}の作品でした。お話を伺うと、危険なものであるから手放したい、博物館に寄贈するか、処分をしてしまいたいということでした。しかし、よく見ると同じ箱に「感謝状」と記された賞状が収められていました。内容は、昭和13(1938)年に「土浦町平和会」が作成した、会の活動に尽力した証に短刀を贈呈するという感謝状でした。この感謝状と短刀のセットにより、戦前の時期に水戸の刀を感謝の印として贈っていたという歴史的な事象が確認できたのです。この重要性は金銭的な価値には換算できません。その旨を伝えた後、博物館で資料を引き受けることに決め、土浦町平和会に関する追跡調査も行っています。皆さんもご自宅で古いものが出てきたら、売ったり捨てたりせず、ぜひ博物館へご相談ください。歴史的な価値観を見つけるお手伝いをします。

(西口正隆)

情報ライブラリー更新状況

【2019・1・5現在の登録数】

古写真 595点(+1)

絵葉書 507点(+1)

※()内は2018年10月2日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2018年度
冬季展示室だより(通巻第45号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2018年度冬季展示は、2019年1月5日(土)~3月8日(金)となります。「霞」2019年度春季展示室だより(通巻第46号)は2019年5月11日(土)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー)